



# しびき



## CONTENTS

- 8 平成28年度暦年出荷実績
- 7 ドラム缶JIS改正完了
- 7 ペール委員会ベトナム視察報告
- 5 AOSD国際会議報告
- 4 新社長登場・前田製作所 足立敏社長
- 1 平成29年賀詞交歓会



# ドラム缶工業会 賀詞交歓会



ドラム缶工業会 小野 定男理事長



## 賀詞交歓会

### 理事長挨拶

ドラム缶工業会の賀詞交歓会が1月13日(金)午後5時30分から、鉄鋼会館(東京都中央区)で開催されました。冒頭、挨拶に立った小野定男理事長〔JFE コンテナ(株)社長〕は、本年の課題や活動について下記のように述べました。



皆様、あけましておめでとうございます。

本日はご多忙にもかかわらず、経済産業省 坂元耕三金属技術室長様をはじめ、多くの皆様のご出席を賜り、誠にありがとうございます。

新年にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

昨年を振り返りますと、熊本地震や相次ぐ大型台風の上陸など多くの自然災害に見舞われた一年でした。また、海外では、英国のEU離脱など、予想外の事態が相次ぎました。

私たちの身近なところでは、鉄鋼主原料の急騰により鋼材価格が急激かつ大幅な上昇を続けています。

今年国際政治と絡み合ったグローバル経済急変への備えをしっかりと行うと共に、事業環境の変化に対しては、スピード感を持って果敢に対応しなければなりません。併せて、企業家精神を大いに発揮して、不断のイノベーションを怠ることなく、経営環境の変化をいち早く新たな事業戦略の実行へとつなげることが大切です。

さて、昨年の新缶ドラムの前年比出荷量は0.1%増加して、増減相半ばしつつ伸び悩みました。今年は企業業績の改善と、個人消費と設備投資の持ち直しにより、内需の緩やかな回復が見込めます。また、世界に目を向ければ、新大統領のもとでの米国の景気拡大に期待が高まる一方で、欧州や中国で政治イベントが相次ぎ、保護主義的な動きが強まる可能性があります。これらが私たちの事業活動に与える影響を注視していかなければなりません。

加えて国内では、石油化学業界に迫る「2017年問題」に注目が集まっています。米国のシェールガスや中東のエタンガス、そして中国の石炭由来の石油化学製品の増産が予想され、製品が世界各地に流入する可能性が指摘されています。私たちのお客様にどのような影響を与えるのか、注意深く見ていく必要があります。

なお、昨年の年頭挨拶でも申し上げましたが、わが国の石油化学業界では高機能・高付加価値の製品へのシフトが急速に進んでいます。容器として鋼製ドラム・鋼製ペールを選択していただけるよう、一層の企業努力が求められる一年になると思います。

さて当工業会の昨年の活動を振り返りますと、引き続き「環境・安全」と「技術力の向上」、「社会への情報発信」をキーワードに、会員各社の協力の下、さまざまな活動に取り組んでまいりました。国際基準と国内基準との整合性を図ることは、当工業会の重要な使命と考えておりますが、3年前から取り組んできましたドラム缶関連のJISの改正作業が完了し、官報に公示されるのを待つばかりとなりました。今後は、ISOの改訂に取り組んでまいります。

安全については、7月に常設の委員会として安全委員会を発足させました。災害事例の傾向分析などを行う年報の発行のほか、工業会会員企業ゼロ災害を目指して、安全対策活動を強化してまいります。

国際活動では昨年11月29日・30日の2日間にわたり、インド・ムンバイ市で第9回 AOSD アジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協会の国際会議を開催しました。今回はインドドラム缶工業会の主催により、17の国・地域から210名を超える参加者が集まり、“Reengineering Steel Drums Manufacturing”を統一テーマに、7カ国から22の発表があり、活発な議論・質疑が交わされました。

当工業会からも約60名の皆様にご参加いただき、ドラム缶から4件、ペール缶から1件の技術論文を発表しました。私ども工業会会員の皆様が今回の国際会議の議論をリードし、会議の成功に多大なる貢献をしていただきました。この場を借りましてお礼申し上げます。

また、ICDM 国際鋼製ドラム製造業者連合会では、わが国の提案により新たに設置した技術委員会において、危険物の輸送や保管などに関する各国・各地域の規則・規制に関する議論や ISO の改訂などを進めております。さらにペール委員会では、3月に豪州、12月にベトナムに、

技術調査団を派遣するなど活発に海外との技術交流を行いました。

昨年は地震や台風などの災害が多い年でした。そのなかでも4月に起こりました熊本地震では大きな被害が出ました。被災された皆様には改めて心よりのお見舞いを申し上げます。

当工業会では、経済産業省のご要請により、ドラム缶100本を南阿蘇村へ無償で緊急出荷いたしました。本対応につきましては、経済産業大臣から、また依頼元の九州電力様より感謝状をいただきました。災害時緊急支援物資としてのドラム缶の使命を果たすため今後も必要な対応をとっていく所存です。

ドラム缶、ペール缶は、ほぼ100%リユース・リサイクルされる優れた「環境共生容器」です。昨年はドラム缶と他の容器との比較調査を行いました。環境フレンドリーな優れた産業容器としての特長を広く社会に認知、評価していただけるよう、今年は積極的な情報発信を展開してまいりたいと考えています。

技術委員会では、口金やバンドの表面処理について、より一層環境に優しい技術の評価を進めてまいります。

また、技術委員会、ペール委員会では、海外への技術調査団の継続的な派遣を計画している他、各種資料などを通じた海外事情の調査や、わが国産業のさまざまな製造技術の調査等を計画しています。こうした技術調査活動を通じて、当工業会会員企業の技術力の向上に役立ててまいりたいと思います。

コンプライアンスについて一言申し上げます。工業会活動の健全な発展のためには、会員各社が強いコンプライアンス遵守の意識を持って、責任ある行動を取ることが不可欠です。当工業会としても継続してコンプライアンス研修などの機会を設け、コンプライアンスの徹底を図ってまいります。皆様のご理解と、ご協力をお願いいたします。

最後となりましたが、本年がご列席の皆様およびご家族の皆様、そして当工業会にとって、実り多い、輝かしい一年となることを祈念し、新年のご挨拶といたします。





経済産業省 製造産業局 金属技術室 坂元 耕三室長



ドラム缶工業会 長島 裕副理事長 (ジャパンパール社長)



ドラム缶工業会 山本 和男副理事長 (山本工作所社長)

引き続き来賓を代表して、経済産業省製造産業局金属技術室の坂元耕三室長より、祝辞をいただきました。



昨年4月に発生しました熊本地震では、被災中に急遽、燃料用容器が必要になりました。どこへどのように運んだらいいのか? 数はどのぐらい必要なのか? などが不明な初動段階でドラム缶工業会事務局へ相談いただきましたが、理事長を中心に迅速な対応をしていただき、誠にありがとうございました。余震が続く被災地へ届けていただき、映画のワンシーンのような緊張感がみなぎるなかで対応していただきました。多くの関係者のご尽力とご厚意に感謝いたします。

国内の視点では、設備や研究開発への投資、賃上げ、下請取引ガイドラインの見直しなどへの対応が必要です。省エネなどのエネルギー対策、ワークライフバランスなどの働き方改革、東京オリンピック・パラリンピックに加え2025年大阪万博の誘致など、いろいろな課題に取り組んでまいります。

国際の視点では、米国の新政権、英国のEU離脱、中国の景気動向などの趨勢が不透明であります。インドのセーフガードや最低輸入価格制度など不公正な政策に対しては是正を呼びかけていきます。鉄鋼製品の世界的な生産能力が過剰な状態に対しても国際交渉などの場で改善を訴えていきます。地球温暖化に関するパリ協定に関しても日本の技術や貢献をしっかりと評価してもらうように活動していきます。

これらの国内外の多数の課題に対して工業会のお力添えが必要ですので、本年もよろしくお祈りいたします。

来賓祝辞を受けて、長島裕副理事長〔(株) ジャパンパール社長〕が「統計資料を見ますと、10年前のパール缶出荷数量2,200万缶から、毎年少しずつ減っていましたが、2016年には1,918万缶と前年比増になったことは、喜ばしいことです。昨年パール委員会は、オーストラリア、ムンバイやベトナムなど海外視察をし、積極的な活動を行った一年ではないかと思えます。パール缶の良いところをお客様に認めていただくことが大切だと思えます。来年また振り返った時に、数量が増えていたら良いと思えます」と挨拶し、乾杯の発声の後、和気あいあいとした歓談、意見交換が行われました。

中締めでは、山本和男副理事長〔(株) 山本工作所社長〕が「先ほど金属技術室 坂元室長様より身に余るお褒めのお言葉をいただき、ありがとうございました。実際にドラム缶を運んだのは、普段から協力していただいている運送会社で、被災後すぐに熊本へ向かってもらいましたが、市内に入れず引き返し、東側の大分県から山越えをし、無事に100本のドラム缶を届けることができました。被災地の皆様は大変かと思いますが、昨年末には、橋などが整備され、徐々に復興されているようなので、これからも頑張ってくださいことをお祈りいたします。各社、皆様のますますのご発展とご健康、ご安全を祈念しております」と挨拶しました。

平成29年の賀詞交歓会には関係省庁や関係諸団体、会員各社、ドラム缶工業会関係者ら約150名が参加、盛況のうちに終了しました。



ドラム缶工業会 専務理事 事務局長 本田 信裕

## 株式会社前田製作所



代表取締役社長 足立 敏

1946年に前田 磯友氏が創立し、鋼製ペール缶の生産・販売をスタートさせた前田製作所。1987年には日本で初めてプラスチックペール缶を生産するなど新しい取り組みにも積極的に挑んできた。千葉工場のほかに、中国、台湾、インドネシアにも工場があり、従業員数は約170名。昨年9月に前田 洋前社長の後を引き継ぎ、社長に就任したのが足立 敏氏である。これまで研究開発や製造、海外部門で培ってきた経験をもとに、今年新たな一歩を踏み出そうとしている。

### 研究開発から海外交渉まで携わる

足立氏は1952年に鳥取県米子市で生まれた。鳥取大学工学研究科を卒業し、前田製作所に就職したのは今からちょうど40年前。配属された千葉工場では研究開発職に就き、オランダのバンリアー社（現・グライフ社）と技術提携しながら、鋼製ペール缶や各種容器の新しいデザインについて検討を重ねた。工場内にある寮での暮らしはオン・オフの区別はほとんどなく、起きればすぐに現場に向かう毎日。工場勤務時代には、日本で初めてプラスチックペール缶を生産した過程にも関わっている。もともと取引先様が生産されていた合成樹脂の用途として提案したのがプラスチックペール缶だった。物を作るだけではなくニーズに応えることで、製造メーカーとして大きなメリットを示すことができた。また、海外部門に配属され、中国への製缶設備の輸出にも力を注ぐ。足立氏は「北京から夜行列車で36時間かけてシルクロード入口まで行き、標高1,500メートルの街で据付を行ったこともある」と懐かしそうに当時を振り返る。

### 共通意識を持って改革を進める

社長就任以前は千葉工場の工場長を務めていた足立氏。工場長時代から社員一人ひとりとのコミュニケーションを大事にしている。「人材は会社にとって大切な資源。これまでも話し合いを繰り返しながら、共通意識を持てるように働きかけをしてきました。まだ途上ですが、今後の海外での事業展開も考慮しつつ、さらに外部研修や他社と意見交換の場をつくるなど、人材育成の

充実を図っていきたい」と話す。足立氏は35歳のときに、プラスチックドラム生産設備の運転技術や管理法を学ぶため、チームリーダーとしてオランダで半年間研修を受けた。「今思い出しても非常に良い経験でした。ヨーロッパのメーカーを訪問し、それぞれの会社の考え方を学ぶ機会にもなりました」。自身の経験から、若い社員たちにはぜひとも海外に目を向けて、視野を広げてほしいと願っている。

### 伝統を継承しながら変化に対応

鋼製ペール缶にしてもプラスチックペール缶にしても、これからどのように市場を広げていくかが課題である。ここ数年の需要が年間2,000万缶を下回る数字で推移しているなかで、デザインそのものを見直す時期にきていると足立氏は考えている。製缶について「手を加えられるところはまだまだある」と言い、「新しい提案をするためには社員が知恵を出し合って、一致団結して取り組むことが重要だ」と話す。製造メーカーとして、引き続き、基盤を強化し、お客様により信頼していただける会社を目指している。前田 洋前社長の急逝で突然代表を引き受けることになった足立氏。前日まで前社長とは「数年かけて会社の体制を強化しよう」と話し合っていたという。「社葬では取引先様をはじめ多くの方々にご会葬いただき、先代や先々代がつくられた前田製作所のつながりを改めて目の当たりにすると同時に、それを引き継ぐ立場としての責任も強く感じました」。71年の会社の歴史とともに、経営者の思いも受け継いでいく。

# 第9回AOSD国際会議開催さる

平成28年11月29日・30日 インド ムンバイ市

アジア・オセアニアの鋼製ドラム製造業者で作るAOSD (Asia Oceania Steel Drum Association アジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協会、会長：小野定男ドラム缶工業会理事長・JFE コンテナ (株) 社長) は、第9回国際会議を11月29日・30日、インド ムンバイ市のJW マリオットホテルで開催しました。

AOSD 国際会議は3年に1回開催されており、技術的なテーマに関する発表・討議が行われました。また関連した設備や資材品の展示ブースも設置され、ドラム缶製造業者だけでなく、各国のドラム缶製造機器メーカーや資材品メーカーも参集しました。

2日間にわたり開催された今回の会議には、17の国・地域から210名余りの参加者があり、当工業会からは約60名が参加しました。

会議の冒頭に、今回の国際会議の主催国を代表してドラム缶工業会セス会長、次に小野理事長がAOSD会長として、それぞれ挨拶を行いました。

会議では“Reengineering Steel Drums Manufacturing”を統一テーマとして7カ国から22の発表があり、『品質管理』『ライン自動化』『環境対策』『ドラム製造設備の発展』『口金の技術開発』『素材技術』『統計』の7つのセッションに分かれて進められ、それぞれの発表に対し活発な質疑応答が行われました。『統計』のセッションでは、ISDI (米国ドラム缶工業会) のスタビック会長、SEFA (欧州ドラム缶工業会) のリナルディーニ副会長およびドラム缶工業会の久保企画・統計委員長が、それぞれの地域における鋼製ドラム缶の統計を紹介しました。また、当工業会からドラム缶から4件、ペール缶から1件の次の題名の技術論文発表を行いました。

「耐デント性能に優れた薄物ドラム」

(JFEコンテナ (株) 永井氏)

「ドラム缶拭き装置の開発・実用化」

(日鉄住金ドラム (株) 畑田氏)



開会の挨拶を行う小野理事長



発表を行う永井氏



発表を行う畑田氏



発表を行う山口氏

「印字乾燥装置 (IH方式) の開発と実用化」

(株) 山本工作所 山口氏

「VOC排出抑制対策としての塗装乾燥炉の

脱臭装置導入事例」

(東邦シートフレーム(株) 三品氏)

「日本におけるスチールペールの自動検査機器について」

(新邦工業(株) 末井氏)

各社の発表は、お客様のニーズに応じて、いかにして新製品・新技術を開発したか、あるいは操業上の問題点を十分に分析した上での操業改善など、事例に基づいた具体的なものであり、各国の高い関心を呼びました。

29日の会議後にインド主催による正式な夕食会があり、伝統的なインド料理がふるまわれると共に、各国の参加者とも交流を深めました。

最終日である30日の最後に小野理事長が閉会の挨拶を行い、次回(2019年)は中国で開催することを紹介した後、中国のドラム缶工業会の張事務局長が次回開催国を代表して歓迎の挨拶を述べました。

会議の翌日の12月1日にはプラントツアーが開催され、ドラム缶工業会からは約40名が参加しました。最初にインドにおける最新鋭のバルマローリー社のドラム缶工場、次にテクノクラフト社の口金工場を見学しました。受入側2社の熱心な説明と手厚い対応により、各工場での熱心な質疑応答が行われ、インドの技術水準の高さを実感しました。



発表を行う三品氏



発表を行う末井氏



閉会式で壇上に整列した各国のドラム缶工業会代表 (左から、インドのセス氏、中国の張氏、米国のスタビック氏、小野氏、欧州のリナルディーニ氏)

# パール委員会 ペトナム視察レポート

パール委員会では2016年2月の豪州視察に続き、2016年11月にムンバイにおけるAOSD国際会議の帰途にベトナム視察を実施しました。今回は、ホーチミン市郊外の2カ所の工業団地へ進出した日本企業及び市内のホームセンターなどを視察し、投資環境、企業運営や製缶業界について貴重な知見を得ることができました。その概要についてレポートします。

## 1. 視察スケジュール

12月1日～12月3日の日程で次の会社を視察しました。

- ロンドウック工業団地 ベトナム光洋機械産業株式会社
- アマタ工業団地 東洋インキベトナム株式会社
- ホーチミン市内の再生パール缶販売店、ホームセンター

## 2. 視察メンバー

氏名	会社
稲田 健二	株式会社 ジャパンパール
松田 賢治	//
大川 正幸	//
金子 賢三	新邦工業 株式会社
末井 洋	//
玉堀 勇二	//
石原 孝一	株式会社 前田製作所
長尾 年晃	株式会社 長尾製缶所
西嶋 義文	//



ロンドウック工業団地前の集合写真

## 3. ベトナムの投資環境

- ① ベトナムの面積は日本の約92%、人口は約9,340万人ですが、平均年齢は28才と若い国です。1980年代後半に社会主義経済から市場経済へドイモイ（刷新）政策の下で転換を行い、経済開放・自由化を進め、低賃金かつ質の高い労働力を背景に急速な経済発展を成し遂げています。
- ② ロンドウック工業団地は、日本企業3社が中心になって2013年に開発した最新の工業団地です。開発総面積は270ヘクタールでインフラが完備しており、日系企業40社が進出しています。アマタ工業団地は1994年に開発され、700ヘクタールの敷地を擁し128社が工場を展開しています。

## 4. 現地の製缶事情

現地では「使用しているパール缶は大半がプラスチックであること、一部危険物運搬容器はスチール缶を使用している」ということがわかりました。



ベトナム光洋機械産業（株）前の集合写真

## 鋼製ドラム缶の3つのJIS改正

ドラム缶工業会では、約3年前から鋼製ドラム缶の3つのJIS（JIS Z 1600 鋼製オープンヘッドドラム、JIS Z 1601 鋼製タイトヘッドドラム、JIS Z 1604 鋼製ドラム用口金）の改正作業を進めてまいりましたが、この度、日本工業標準調査会の審査を完了し、1月20日に官報に公示されました。今回の改正は前回改正（2006年）から10年を経ていることもあり、鋼製ドラム缶を巡る技術的な環境の変化に合わせて改正を行なっております。

# 平成28年 暦年出荷実績

平成28年暦年の200L缶の出荷は、前年に比べ0.1%増、8千本増の13,587千本となりました。

用途別では、石油向け(前年比2.4%増、38千本増)、塗料向け(同15.6%増、98千本増)、食料品向け(同10.8%増、

19千本増)、その他向け(同29.7%増、52千本増)は増加し、化学向け(同1.8%減、199千本減)は減少しました。

ペール缶は前年比1.3%増の19,177千本、中小型缶は同12.3%減の420千本となりました。

## ■平成28年暦年缶種別・用途別出荷実績

缶種	平成28年暦年実績						
	本数 (千本)	前年比 (%)	用途別〔(本数)(千本)〕				
			石油	化学	塗料	食料品	その他
200L缶	13,587	100.1	1,640 (102.4)	10,800 (98.2)	722 (115.6)	195 (110.8)	229 (129.7)
ペール缶	19,177	101.3	10,318 (102.0)	7,786 (101.5)	586 (89.5)	0	487 (97.4)
中小型缶	420	87.7	0	404	4	0	12
亜鉛鉄板缶	366	102.8	0	351	1	5	9
ステンレス缶	40	134.5	0	40	0	0	0
合計	33,590	—	11,958	19,381	1,313	200	737
*前年比(%)	—	—	102.2	98.6	112.6	110.7	122.3
*構成比(%)	—	—	15.6	76.0	5.1	1.4	1.9

(注) 1. 用途別200L缶、ペール缶の下限( )は前年比。 2. \*前年比ならびに、\*構成比は、トン数ベース。 3. 亜鉛鉄板缶、ステンレス缶は、200Lドラムおよび中小型缶を含む。  
4. 総本数は、33,589,738本。表上数値は四捨五入による差異がある。

(単位：千本)

缶種	20暦年	21暦年	22暦年	23暦年	24暦年	25暦年	26暦年	27暦年	28暦年
200L缶	15,019	11,731	14,311	14,041	13,206	13,165	13,717	13,579	13,587
ペール缶	21,808	18,365	20,377	19,744	19,174	19,286	19,188	18,935	19,177
中小型缶	872	637	776	737	626	539	484	479	420
亜鉛鉄板缶	459	384	381	389	373	398	405	356	366
ステンレス缶	37	33	34	38	35	33	37	30	40
合計	38,196	31,150	35,879	34,949	33,413	33,421	33,831	33,379	33,590

## 会員

### 《正会員》

- 斎藤ドラム罐工業(株)
- JFEコンテナ(株)
- (株)ジャパンペール
- 新邦工業(株)
- ダイカン(株)
- (株)東京ドラム罐製作所
- 東邦シートフレーム(株)

- (株)長尾製缶所
- 日鉄住金ドラム(株)
- (株)前田製作所
- (株)山本工作所

### 《準会員》

- 森島金属工業(株)

### 《賛助会員》

- エノモト工業(株)
- (株)大和鉄工所
- 三喜プレス工業(株)
- (株)城内製作所
- 東邦工板(株)
- (株)水上工作所

## ドラム缶工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10  
(鉄鋼会館6階)  
TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969  
e-mail : drum.pail@jsda.gr.jp

URL : <http://www.jsda.gr.jp/>

ひびきNo.74(平成29年2月6日発行)

発行人 ドラム缶工業会  
専務理事 事務局長 本田 信裕

本誌は環境に配慮した工程で印刷しています。